

日露戦争後における朝鮮殖民事業の文化地政学

中根 隆 行

はじめに

日露戦争後の知的言説による朝鮮表象はさまざまな形態をとって編まれる。日韓併合にいたる対韓国政策論、自然発生的に広がる民間の殖民熱に乗じて生産される実業マニュアル、旅行・紹介記による観光案内、地誌・歴史書類など。日韓併合期にかけていわゆる単行書のかたちをとるこの種の出版物は、網羅的に整理すれば夥しい数になると思われる。それらに加えて、新聞雑誌メディアに掲載された朝鮮情報群を視野に含めればなおさらである。けれども、むしろ当然と言わなければならぬのだが、そうした知的言説による朝鮮および朝鮮人のエスニシティ表象は、日清・日露戦争期の新聞雑誌メディアの戦争報道によって規格化された基本的な像——怠惰・汚穢・停滞を主とする偏見を帯びた負的な文化・人種的表象——とあまり大差がない。¹⁾すなわち、初期の社会主義者の言説を除く朝鮮表象は、その大枠において画一的であり紋切り型であるといつてよい。この場合、日本近代の知識人の朝鮮像をたんに批判するのであれば、ステレオタイプ化された朝鮮像の非歴史性を網羅的に提示することが課題となるだろう。だが、このような視点は、なぜ日露戦争後に朝鮮を植民地化にいたる歴史的文脈がある。この歴史的文脈において朝鮮に関する言説を検討することは、日本の植民地主義あるいは帝国主義との連携を把握することに繋がる課題でもある。

本論は、日露戦争後における日本の植民地主義を、朝鮮表象と殖民事業という文化的構造との関係において捉え直すも

のである。おもに同時代の青年層の動向を見据えながら、知的言説による植民地主義と〈殖民〉イデオロギーとの支配のありように力点をおく。特に青年層については、この時代から朝鮮は就職市場や修学旅行の対象として見出されていた。ややのちの事例を参照しておこう。河岡潮風「学窓より觀たる先輩社会」〔太陽〕第一七卷第三号、一九一一年二月）にはこうある。「自分は首席生に問ふた。君は外交官になるか。彼曰く否。反問すらく何故に、彼答ふ。僕の家は中産者であるから、到底大なる栄達が出来ぬからと。／自分は又た更に思想家先生に訊した。卒業後は朝鮮へ行くか。彼曰く、つまらぬからよさう。統監トウカンは武人から出るからと。自分は黙して空照る日の輝きを見た。あゝ人間の社会如何に狭くして、蒼空の如何に広き事よ！」（一五六頁）。現役学生によるこのエピソードは明治末の青年就職事情を物語っている。当時の青年たちの立身出世像の選択肢のひとつに朝鮮があり、しかも「外交官」の場合と同様に、朝鮮総督になるという将来はすでに諦観を惹起するものでもあったのだ。

日露戦争後から大正初期にかけての就職事情は総じて暗澹たるものであった。と同時に、当時は近代日本が本格的な帝國主義的段階に歩を進め、拡張政策を押し進める時期でもある。本論では、次世代を担う青年層に示唆を与える朝鮮殖民事業が、このような時代においていかなる文化的な広がりをもち、朝鮮表象・青年就職事情・国民像形成と重層的に絡み合うのかを検証する。

一、新渡戸稲造の朝鮮像と〈殖民〉の文化的ヒエラルキー

一九〇六（明39）年の朝鮮での視察旅行の模様を記した文章「枯死国朝鮮」において、新渡戸稲造は「朝鮮の衰亡の罪を帰すべき所は、其国の氣候にも非らず、又た其の土壤にも非らず」と書き、その「衰亡の罪」の所在を朝鮮の人々の生活文化に求めている。「韓人生活の習風は、死の習風なり。彼等は民族的生活の期限を了りつゝあり。彼等が国民的生活の進路は殆ど過ぎたり。死は乃ち此半島を支配す」というわけである。新渡戸の場合、道徳的規範として日本人の精神的支柱を西洋人に対して説いた「武士道」があり、それが比較項になったと考えられる。日本近代における朝鮮のエスニシティ表象が負的な像として構築されるのは、それが日本のあるべき自画像との比較対照により同定されるからである。もとより、「朝鮮の衰亡」の理由を「韓人生活の習風」に還元する見方に目新しさはない。興味深いのは、新渡戸稲造の朝

鮮像が、その文化的差異を文明の段階的な連続性において把握していることである。まずは新渡戸の記した朝鮮の田園風景を挙げてみよう。

予は車上全州の野を過ぐ。此地や、韓半島中、最大平原の一なり。秋天高く澄めり。風は凜然又た爽然。〔中略〕田夫は白衣を着て、晚稻を刈り、鎌取りて歌ふ。彼等の多くは、楽しき唄調子にて田家の庭上、木片上に稻を打ち、粗を扱く。茅葺の掘立小屋は、村圍を成す。破垣の間より折々、女の杵もて木臼に米を舂くさま忙しげなる見え、又た赤き上衣、白き股引の小兒は、日本人の旅客を覗ひ、目を張りて驚き呆る。

其生活やアルカヂア風に簡樸なり。予は千年の古へ、神代の昔に還りて生活するが如きの感をなす。打見る、多くの顔は神の姿かと誤たる、ばかりに、恬淡、莊嚴、端正なり。されど毫も表相無し。此国民の相貌と云ひ、生活の状態と云ひ、頗る温和、樸野且つ原始的にして、彼等は第二十世紀、はた第十世紀の民に非らず、否な第一世紀の民にだもあらずして、彼等は有史前紀に属するものなり。(八〇—八一頁)

この牧歌的な全州の田園風景の粹取りは、朝鮮を停滞した劣等社会とみなし、それを古代的な文明の原風景と位置づけ美的に表象するという作業である。このような朝鮮表象は、のちに高浜虚子や田山花袋が平安文化のイメージを朝鮮に重ねた見方の原型として把握できる。如上、新渡戸の粹取りは植民地主義の論理を招き寄せる。新渡戸はすでに「韓国に於ける我が宗主権、若し其国の痛患を緩和する能はずんば、吾人は此国に対して何等の優越を主張するの権限を有せず」〔日本の新責任³⁾〕と主張していた。後年、彼は植民政策に関して次のように述べている。

キップリング曰く、劣等なる土民を征服して啓発するは“White man's burden”〔白人の負担〕であると。之は、天より負はせられた重荷の意である。植民は劣等なる者を高尚にする為め、換言すれば俺の如くにする為め、といふのであつて、植民 colonization は実⁴⁾は征服 domination であり、民族精神は capitalism (資本主義) の形式を取りて顕はれる。(植民政策講義及論文集¹⁾)

この新渡戸稻造の植民政策の理解は的確である。植民地主義とは、ある国家が他の国家を政治的に統治・支配することを指し、なおかつ、資本主義的拡張としての帝国主義の発展型である。新渡戸はそれを「民族精神」(nationalism)の拡張的イデオロギーとしても把握している。全州の田園風景から見出された劣等社会朝鮮という構図は、やがて「植民は劣等なる者を高尚にする為め」という植民地経営を正当化する与件になるであろうことは想像に難くない。だが、注意すべきは、このような新渡戸稻造の植民地言説が、あくまで国家政策に加わったいわば知識人の上からの言説だということである。

日本内地でより一般的に伝播した朝鮮像の世俗的認識とはいえ、若干その様相を異にする。島崎藤村が「人生の従軍記」であると語った『破戒』は、被差別部落出身の青年教師瀬川丑松がその出自を告白したのち、テキサスへと旅立つエピローグで結ばれている。その丑松のテキサス行きは同様の出自をもつ大日向という人物によってもたらされるのだが、それがなぜ北米大陸であり東アジア地域でなかったのかということは、『破戒』のなかにも底流する当時の文化的な通念から規定されていたと思われる。丑松の父は彼にこう語っている。瀬川一族の血統は「東海道の沿岸に住む多くの穢多の種族のやうに、朝鮮人、支那人、露西亞人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末とは違ひ、その血統は古の武士の落人から伝つたもの、貧苦こそすれ、罪惡の為に穢れたやうな家族ではない」。ここには、東アジア地域の諸民族に対する偏見が、一族の血統に基づく被差別部落内部の純血的な階層意識として表されている。この意味では、東アジア地域は丑松にとつての新天地にはなりえなかったのだ。その場合、丑松の父が語る「異邦人」の末裔への偏見は、「朝鮮人、支那人、露西亞人」という東アジア地域に対する世俗的イメージによつて媒介されており、なおかつ、それは丑松の海外雄飛の方向性を暗に決定する要因になっていると考えられよう。

青年教師瀬川丑松のテキサス行きというプロットの導入には、日露戦争後の海外諸地域に関する日本人の文化的価値観のヒエラルキーが潜在的に追認できる。いうまでもなく、丑松のテキサス行きは「植民」ではなく「移民」である。一九〇五(明38)年以降、朝鮮及び満洲と露西亞の一部への移住は「移民」扱いとはならなかったのだが、「植民」「移民」二語の一般的使用法といえ、当時これを区別して使用する意見が知識人に多かった。たとえば東洋殖産株式会社の起草者でもある嶺八郎は「植民は主として我れよりも文明低き境域に行はるゝものにして移民は寧ろ反対の傾向を有し居候」と述べ、「植民」するにたるべき具体的な地域として「韓国」「満洲」「南洋諸島」を挙げている。これに関していうと、単

身の短期的出稼者が〈移民〉であり夫婦あるいは家族でその地に移り住むのが〈殖民〉だという見方もあり、また必ずしも〈殖民〉〈移民〉の二語が厳格に区別して使用される傾向にあったとはいえない。けれども〈殖民〉なる語に「文明低き境域」へ赴くという文化的階層化が明らかに示唆されていた事実は注目してよい。

新渡戸稲造や嶺八郎の把握からすると、「文明低き境域」への〈殖民〉は、その「民族精神」をイデオロギー的に移植するための人的資本であつたといえるであろう。だが、日本政府の対外政策に準じて生産される知識人の〈殖民〉を奨励する言説群とは裏腹に、一般的には東アジア地域に関する文化的イメージは偏見を帯びた異文化像で語られる傾向にあり、それが直ちに朝鮮渡航・移住者らに「民族精神」の移植として自己正当化されたわけではない。なによりも、当時それは忌避的に語られていたからである。つまり、新渡戸や嶺のような知識人の思惑と実際行われる殖民事業には、より錯綜した連動性を問わねばなるまい。射程となるのは、日露戦争後に推進された殖民事業においてこの両者を調停してゆく文化的プロセスの分析にある。

二、朝鮮渡航・移住者と就職市場の拡張

まずは朝鮮を中心とする実際の殖民事業を概観しておこう。日露戦争後の対外拡張政策は、北海道や台湾のみならず、直ちに朝鮮及び満洲へと向けられてゆく。一九〇六（明39）年の韓国統監府開庁と南満洲鉄道株式会社設立、一九〇八年の東洋拓殖株式会社設立、一九一〇年の日韓併合。こうした朝鮮植民地化のプロセスを背景に急増するのが朝鮮渡航・移住者である。一九〇五（明38）年九月に就航した関釜連絡船朝鮮行の渡航者総数は、初年度四ヶ月間で七三二七人であつたのが翌年には通年で五一五八三人を数える。この後も徐々に増加し、一九一〇年には七三三五五人に上つている。また、朝鮮在住の日本人居住者人口は、一九〇六年の総数八三三二五人から一九一〇年には一七二五四三人へと倍増する。なかでも、経済不況の年で知られる一九〇八年の前年度比人口増加率は二八・七四%を記録することになる。急増する朝鮮渡航者という社会現象には、日本の保護國に置かれた朝鮮への人的移動という観点から、如実に帝國主義的な拡張の構図が浮かびあがる。

日本による朝鮮植民地化のプロセスにおいて産業資本とともに重要視されたのは、日本人農業移民者への土地払い下げ

を主要目的とする東洋拓殖株式会社^⑩の設立意図に象徴されるように、人的資本の投入——殖民事業——にあった。もとより、農業なり商業なりで生計を立てようとする渡韓者は日清戦争後から徐々に現れる傾向にあったのだが、朝鮮渡航者が飛躍的に増加するのはこの時代からである。日本政府は日露戦争時に朝鮮への農業移民を奨励しており、一九〇六年の土地家屋証明規則においてはじめて日本人が朝鮮の土地を合法的に所有することができるようになったのがその大きな要因である。のちに東洋拓殖株式会社が公的に殖民事業——「移住民募集」——を開始するのは一九一〇年からであることを考慮すれば、この時期の朝鮮移住者の増加は民間主導の感が強い。

もちろん、朝鮮渡航・移住者のなかには学校卒業者も含まれる。たとえば『日本帝国文部省第四十年報』の神戸高等商業学校と山口高等商業学校における各「卒業後ノ状況」の統計図表には、それぞれ「朝鮮吏員」「朝鮮地方金融組合員」欄が設けられている。卒業者の就職統計図表に特定の地域が設けられる事例がきわめて稀であることからすれば、両校の朝鮮就職市場への並々ならぬ関心の度合いが窺えるであろう。また、こうした統計には明示されないものの、帝国大学・高等師範・実業学校等の卒業者のなかには弁護士見習・自営業等さまざまな職種で朝鮮に就職する青年たちが確認できる。長崎高等商業学校の就職状況を伝える記事には「最高給で招聘せられたのは矢張り韓国行で度支部理財局出仕の六十円、これが三人で共に二十二歳の青年である」ともある。また神戸高等商業学校では、神戸実業協会と連携し一九〇五(明38)年夏の堀内泰吉と竹中政一の韓国視察旅行を支援しており、就職市場としての朝鮮に早くから対応している。その視察の模様を纏めた「韓国旅行報告書」(一九〇六年)には「日露両国戦端ヲ開クヤ韓国ヲ談ズルモノ日一日ト多キヲ加ヘ或ハ農ニ或ハ工ニ或ハ商ニ各自出張シ或ハ他人ヲシテ視察ヲナサシメ其事情ヲ明ラカニセントスルヤ急ナリ」と記される。ひとつの事例を挙げておこう。「滿韓に往くべし」(『都新聞』、一九〇六年六月一日)は、台湾協会学校の就職事情についてこう述べている。

台湾協会学校ハ、創立以来まだ日が浅いから、取り立て、お話しする程の事も有りませんが、それでも幸に卒業生の多くハ台湾を始め清韓方面へまゐりまして、夫れ々々相当の職を執て居ます、其の人々の報酬と申してハ先づ月に三十円から四十円位迄の間ですが、無論内地に居るよりハ多少進級の度が早い如うです。

今年の新卒業生も遂々出ますが、何分清韓方面に於ける戦後の事業がまだ整頓しませんから、需要の口が思はしく有

りません、学校でハ成る可く確実な需要者即ち雇主を選で其人に依頼したいと思ひますが、併し今日の情勢でハ多くの人を悉く周旋して口を与へる事ハ困難です、少し残酷な申分ですが、口が無ければ自分で志を立て、何事かを彼地で自営する如くにあり度いと思ひます。

日露戦争後に青年たちに開かれた東アジア地域の就職市場は、ある程度優遇されていたのだ。もとより、東アジア地域への就職については、日本国内でも満洲の鉄道関係・台湾の国語教師などの事例がみられる。なかでも朝鮮は、おもに西日本地域の実業学校を中心とする学校卒業者の新たな就職市場として特に注目されており、なおかつ、その条件は格段に良好であったことが窺える。満洲・台湾といった地域を含めてみても、国内での就職事情と比較すればその待遇の差は歴然としていたといつてよい。その場合、東アジア地域に雄飛する青年たちに求められたのは、たんに就職するというよりも、諸地域において彼らが自力で就職市場を開拓してゆく尖兵という役割でもあったのだ。

朝鮮をみずからの新天地として積極的に見出す青年層も確実に存在していた。佐村八郎『渡韓のすゝめ』(一九〇九年、「初版」)は、そんな青年たちのために刊行された単行書のひとつである。初代韓国統監伊藤博文の助言により「韓国百年の後を杞憂」するとともに「吾が青年の目下の發展を謀¹⁶」ることを目的として編まれたこの書籍には、以下のような箇所がある。

余が今度韓国視察を思ひ立つたのは、近来見聞することの中で、台湾とも云はず、樺太とも云はず、北海道とは尚ほ云はずに、韓国へ往つて見たい。彼国で何か一仕事やつて見たい、といふ青年の聲が聞えた。其の青年が頗る多いやうである。地利の便利からでもあらうが、広島、山口、九州地方の者などは、其んなことなど云つては居ない。云ふよりさきに船に乗り込んで仕舞ふ。「中略」だが、東京辺の者には、何かの便益が少い。往つて見たくても道が遠い、又先進者が少い。従つて誘はれるどころか、様子さへ碌には聞かれぬ。(二一・四頁)

一九〇九年の時点で佐村八郎『渡韓のすゝめ』のような渡韓案内書がおもに東京地域の青年層を対象に編まれていたという事は、書籍購買者として想定できる程度に渡韓志望者が顕在的であったことの証左でもある。現に本書は三年間で

三版を重ねる。こうした渡韓案内書のみならず朝鮮関係書籍は当時漸次刊行されていたし、またそれは書籍に限らなかつた。日露戦争後、青年たちの立身出世のひとつの選択肢に朝鮮があつたのだ。たとえば夏目漱石『彼岸過迄』では、就職先がいまだ決まらずにいる探偵嗜好をもつ敬太郎が「責めて此単調を破るために、満鉄の方が出来るとか、朝鮮の方が纏まるとかすれば、まだ衣食の途以外に、幾分かの刺戟が得られるのだけれども」と思案する場面がある。朝鮮に赴く実際の渡航者やそうした人々を風評で知る者たちにとつて、朝鮮に渡航し就職するという青年たちの選択は一念発起のそれとして映つたはずである。

日露戦争後に開かれた就職市場朝鮮はまた、劣等文化の指標として測られていた地域でもあつたということを忘れてはならない。このような負的朝鮮像は一般的にもある程度共有されたと考えてよい。この場合、当時の負的朝鮮像を世俗的に伝播するエイジェントとして重要な存在であつたのは、朝鮮殖民事業のプロセスのなかで朝鮮から帰還した渡韓経験者でもあつたことである。中村星湖に「朝鮮へ、朝鮮から」という短篇小説がある。中村星湖は当時第一回早稲田文学懸賞小説受賞（少年行）によつてデビューしたばかりの二三歳の新人作家である。この短篇小説には「朝鮮と言へば、満目荒涼として、草も木も無い所のやうに思はれる。『アマリにのんびりして世の中の事はよく分らぬには困る。』と言ふ手紙の一句で尽きて居るやうな気がする」という箇所がある。これは朝鮮へ渡つたという友人小林喜一の手紙を突然受け取つた渡韓経験のない「私」が抱いた印象であり、朝鮮が未開拓——「満目荒涼」——な地域であることが「私」の想像するその像の前提になつてゐる。この「私」の朝鮮像は小林宛の手紙が宛名先不明として戻ってくることで助長される。そして文科の校友大会に突然現れる第二の渡韓経験者倉橋の登場シーンは、以下のように記されている。

スツと食堂の入口を入つて其〇君の側に立つた人があつた。油気もなくバサバサと延び過ぎた髪、恐ろしく痩せこけた顔、薄汚れの襟垢の光るやうな黒のインパネス、其下には四五枚和服の重着をして居た。

『ア、今着いた所だ。』と答へたが、嬉しいやうな顔でも無かつた。（九頁）

これが朝鮮から帰つてきた日本人青年の描写である。それも同窓の大学卒業者である倉橋は歴とした京城の新聞社の三面主任として赴任しており、日本内地の新聞雑誌へも寄稿していた人物として造型されている。この倉橋の存在は「まる

で明るみへ差した黒い影だー」（一一頁）と評される。このように朝鮮の文化的イメージが、元山に渡った小林喜一の手紙や京城帰りの倉橋の風貌に媒介された「私」の想像力に委ねられることには注意したい。エピソードにおける「私」は、この倉橋に小林喜一の行末を重ね合わせるとともに、「自分の事までが恐ろしくな」（一二頁）るのだ。つまり、中村星湖「朝鮮へ、朝鮮から」にみられる朝鮮像は、渡韓帰りの日本人の形象描写から間接的に導出されることになる、朝鮮に対する底知れぬ恐怖として語られている。

ここで朝鮮像が恐怖のイメージを伴って表象されるのは、それが直接・間接を問わない朝鮮渡航者の経験を媒介にして語られるからにはほかならない。もちろん、これはひとつの事例にすぎないのだが、朝鮮像の伝播・流通は日露戦争後に飛躍的に増加する朝鮮渡航・移住者の存在を抜きにして考えることはできない。青年層にしてみればそれはなおさらであった。このようにみれば、青年たちからみた朝鮮という新たな就職市場はかなりリスクを伴う場であったことが推察できる。またそれは渡韓経験者の存在が内地の日本人にとつてより身近なものになりつつあったことを示唆してもいる。

三、明治末青年就職事情

日露戦争後の朝鮮は、青年たちが雄飛する一念発起の就職市場として注視されていた。もちろん、この時代の殖民事業は青年たちの就職市場にとどまるものではない。だが、こののちということを考えるのであれば、青年層に焦点をあてることは重要であると思われる。青年たちが朝鮮に雄飛するのだと選択することは、当然ながら大きなリスクを背負うということの意味していた。未知なる境域、開発途上の就職市場、語られ伝播される負的朝鮮像。それでは、就職市場朝鮮という選択肢は当時どのような社会状況と対照され見出されたのであろうか。

日露戦争後の経済・社会状況を概観しておこう。日露戦争での戦勝は戦病死者一二万人、戦費一五億円という犠牲の上で成立する。戦後、ポーツマス条約でロシアからの賠償金を得られなかったことに由来する莫大な外債の償却や戦後の国家財政の膨張により、日本政府は戦時の非常特別税を恒久税として継続する財政政策をとり租税や公課負担の増大を助長する。加えて一九〇七（明40）年のアメリカに端を発する世界的規模の不況の影響により、日本経済は新興産業の電力・ガス二部門を除く主要工鉱業部門を中心に日露戦後不況と称される時期を迎える。もうすでにこの時期は「日本資本主義が

帝國主義段階の世界資本主義体制のなかにいわば有機的に完全に組み込まれていた¹⁹⁾時代でもあるのだ。けれどもその内実はというと、日本経済がその発展の基盤を外債に依存していたとはいえ、日清戦争後の生産停滞期と比べてもむしろ活発な経済的成果を計上していた時期でもある²⁰⁾。つまり、日露戦争後の数年間は、日本が近代的な資本主義社会へと本格的に移行する過渡的な編成期であったのだ。

だが、日比谷焼討事件や各地方で頻発する労働争議、社会主義の問題化といった時代状況を考慮すると、世相的にみれば社会的な不安が蔓延しており、それが相乗効果的に経済的不況感を助長させていた時代でもあった。それに対して、日本政府は一九〇八(明治四一)年に戊申詔書を發布し、内務省を中心に農村再編を目的とする地方改良運動を全国的規模で推進する。戊申詔書の基本方針は、国民の協調精神と奢侈の戒めを説くことで労働争議などの運動や地方の地主小作関係の動搖、実利追求の風潮を牽制するという点にあった。地方改良運動との連携という観点からすれば、戊申詔書の發布は、中央集権的な経済圏確立の急務のために国民の精神的土壌の培養を目的とするといえるが、逆に言えば、そうした社会状況に対する体制側の相当な危機意識を物語るものとも考えられよう。

こうした時代風潮のなかで目を青年層に転じると、自然主義現象と連関して語られることになる煩悶青年を代表とする負的青年層の存在が再び社会問題として浮上している。E・H・キンモンスは、日露戦争後における煩悶青年出現の原因を、「家族の伝統的道德観の崩壊」「日露戦争以後の目標喪失状態」「近代化の代償としての必然的な反動」という従来論的把握からではなく、「高学歴青年の就職市場の変化」という社会・経済論的視点に求めている。つまり、就職事情に裏づけられる青年たちの現実がもはやそれまでの立身出世像と隔絶してしまっており、それが彼らの「立身出世をロマンチックな自己実現追求へと」駆り立てたのだとする見方である(『立身出世の社会史』、玉川大学出版部、一九九五年、一九三頁)。E・H・キンモンスは煩悶青年の出現を社会現象として把握しているのだが、その「就職市場の変化」が青年たちと与えた心理的影響は日露戦後不況ともいわれる時代にあつてきわめて深刻なものであった。

年々官公私立学校の卒業生増加して、其の供給益々豊なるに引替へ、需要は之に伴はざるにより、所謂経済学上供給需要の関係よりして、其の市価益々下落し、十数年前までは、大学卒業の学士といへば、猫も杓子も六十円より以下の月俸にて、職に就くものはあざりしなり。又高等師範卒業生も、只其の肩書文けにて、四十円以下の月俸にて職

に就くものなかりき。高商高工さては私立専門学校の卒業生、皆夫々高棒を得て職に就けり、故に卒業さへすれば、夫れで世に立てるといふ、極めて単純なる事情なりしが、近年に至りては然らず、現に此等官公私立学校卒業者に於て、糊口の道さへなく、輾転流浪するものも少からず、所プロレタリアートの数年々増加し行くは、国家社会の爲めにも、甚だ憂ふべき現象といふべし。〔●卒業生〕、『教育時論』第八三八号、一九〇八年七月二五日、四五頁〕

煩悶青年と称される青年層は、ここで示されるような学生層に多く占められていたと考えてよい。もちろん、就職事情の悪化は高等教育を受けた青年たちにも限つた現象ではない。一九〇七年度における前年度公立中学校本科卒業生一六八八名のなかで「就職等未定又ハ不詳ノ者」は四〇一三名を数えている。「就職等未定又ハ不詳ノ者」に含まれる卒業生全員が就職難に瀕していたとは到底考えられないのだが、その割合が非常に高かつたというのは推察できよう。こうした事情を考慮すれば、特に文学領域で注視される煩悶青年という成型も、日露戦争後の閉塞的な社会状況を反映する代表的な青年像として造型されたと思われる。高学歴を有しながらも苦悩するという青年像は、それを経験的に知る文士にとって当時の社会状況を代弁させて語るのに格好の人物像であつたのだ。煩悶青年の成型は、当時の青年層を代表するのみならず、閉塞的な時代状況の隠喩としても語られていたのである。

青年たちの就職事情を悪化させた要因は、再編する日本の社会構造それ自体に由来する。とりわけ教育メディアでは、このような時代を反映した学生の就職事情を語る言説が多々見受けられる。興味深い事例を取りあげてみよう。曾根金徳「学校卒業生の就職難」は「彼等〔学校卒業生〕の叫びは、自から奮起して従事経営すべき職業なしといふにあらずして、自己を備用すべき官衙なく、学校なく、会社なく、銀行なく、商店なしといふ声也」と述べ、「自己の手によりて職業を得、自己の力によりて事業を興し、以て自己の運命を開拓せんとする」学生を待望すると主張している〔『教育界』第七卷第一号、一九〇八年九月、三頁〕。曾根は「職業難」と「就職難」とを区別して使用する。この頃から学校卒業生の職業形態として徐々に高い割合を占めるようになるのは給与所得者——サラリーマン——なのである。この指摘は前掲引用にあつた「プロレタリアートの数年々増加し行く」という件とも対応する。青年の就職事情の悪化は、たんに経済的不況という理由のみで片付けられる問題ではないのだ。就職市場——「供給需要の關係」——の変容は、この時代が二〇世紀初頭における近代資本主義社会への編成期にあたり、富が資本家に集中し貧富の格差が広がる一方で、近代教育制度の

整備・多様化の推進によって上位の教育機関に進学あるいは卒業し就職する学生数が全国レベルで増加したと密接に関わっている。すなわち、明治期前半的な立身出世に憧れ、なおかつ、高等教育によって知的教養を有する学生が量的に増え、その結果として社会的上昇志向を有する学校卒業者の増加に当時の就職市場が対応しきれなかった観が強いのである。

だが、青年たちが資本主義的成功にいたる道筋は決して開かれていなかったわけではない。資本主義社会への移行は、本来的にその経済圏の帝国主義的拡張を特徴とする。この点、順を追って考察しよう。自己の力で事業を起こす青年実業家を待望した曾根金僱の見方は、日露戦争後の顕著となる起業家の増加現象に裏打ちされている。たとえば、『成功』第九卷第六号の時評「戦後の事業熱」（一九〇六年九月）は「余輩は素より、日露戦争の終結せし今日に当り、斯る事の再度我国に顕れ来らんことは思量せざる所なれども而も新聞の伝ふる所に拠れば、戦後一年を経し今日に当り、事業熱俄然として勃興し来りしもの、如し」（五六―五七頁）と伝えている。記事の文意は、「事業熱」の勃興に賛同するというよりもその安易さを戒める内容であるが、この時期の『成功』時説にはその他「投機熱」「探検熱」といった語彙が散見でき、資本主義的成功を目指す者たちが現象となつて存在していたことが確認できる。

近来探検に関する世上の熱は著しく勃興し来れり、或は蒙古の地を探検せんとする者あり、或は滿韓の諸地を探検せんとする者あり、或は単身無資力を以て浦塩に探検旅行を企てんとする者あり、〔中略〕思ふに、探検は我国が海外に活動するの先驅、我國民が島國的根性を打破するの唯一基礎たるが故に続々我國民は探検を實行して国の内外に關する新知識を増加すると共に、艱難に堪へ、事業を遂行するの銳氣を養ふ所なかるべからず、豆小的の眼光を有する世の憶病者は之を見て喫驚すべきも、我國發展の大局より打算すれば此事最も必要の事に屬す、豆小的論者以て如何と為す、〔記者〕探検熱の勃興、『成功』第九卷第五号、一九〇六年八月、五九頁）

「事業熱」「投機熱」「探検熱」といった語彙に看取できるのは、それが民間発の自然発生的な社会現象という意味合いであろう。おそらく村上瀧浪の筆と推測されるこの記事には、国内における「事業熱」「投機熱」の勃興を戒めるような危惧や警鐘とはきわめて対照的に、海外へと向かう「探検熱」を積極的に煽っているという特徴が認められる。その対象となる地域は「蒙古」「滿韓」「浦塩」であり、「探検」とは海外への「事業」拡張の予見的隱喩としての役割をはたして

いるのである。この個人レヴェルの資本主義的成功を目指すための地政学的方向性は、国内にあってはおもに東京に収斂するのだが、『成功』その他のメディアが海外に目を向ける者たちに提示したのは東アジア地域であったのだ。ここからすれば、青年たちの資本主義的成功へといたる道筋は、このような青年向け雑誌メディアを媒介にして海外それも東アジア地域に向けられていったという仮説が立てられる。すなわち青年たちの就職事情に象徴される国内の閉塞状況と資本主義的成功の方途として開かれる海外雄飛という枠組みである。

四、媒介するメディア——成功雑誌社『殖民世界』——

国内において企図される青年たちの資本主義的成功への道筋は、いうまでもなく東京へという地政学的な方向性をもつ。けれども、この時代における特に保守的な言説の趨勢は、東京という環境が立身出世のひとつの要素を担うことを逆に抑制する傾向にあった。当時、おもに都市部における青年文化のありようが知識人やジャーナリズムにおいて「風紀頹廢セル傾向」として語られており、地方出身者の東京遊学に警鐘を鳴らし、青年たちの立身出世の欲望を地方にとどめようとす力学が働いていたからである。このような風潮にあって青年たちが活躍する場は、メディアその他の知的言説によつて地方と海外という二つの選択肢をもつて提示される。成功雑誌社『成功』を主宰する村上濁浪「本邦小作民子弟と海外活動」は、東京遊学はいうに及ばず、地方での上位学校への進学さえも望めない環境にある小作農民層出身の優秀な子弟を、東京という環境を経由せずに、海外へと振り分ける方途を模索する。

其天質より言へば彼等の中にも決して英物なきにあらず、尋常小学に於て其学力を比較すれば優に富豪の子弟を凌駕する者なきにあらず、其天才を比較すれば遙に権門の子弟に超越する者多々あるなり、而も斯る英物も天才も等しく是れ貧と云へる泥土の中に埋没せられ、其一生を終らざるべからずとせば是豈悲痛涕泣に値せずや、余輩は思ふ、〔中略〕希くば是等の小作農民の多数が団体を為して朝鮮、米國、布哇、滿洲等の各地に移住せんことを、是れ独り是等小作民の幸福なるのみならず、又國家の大經濟なり、〔『成功』第九卷第六号、一九〇六年九月、二三頁〕

時流に見合った成功主義を提唱し青年読者に向けて高らかに掲げた村上濁浪は、日露戦争後においては青年たちの成功の方途を海外に見出してゆく。青年たちを海外へと向かわせるといふ人的投資的思考には、国内の閉塞的状況といういは内省的な視座からする打開策として発せられている。けれども「小作農民の多数が団体を為して」という件には、その擴張的政策が如実に植民地経営の先行投企として結びつくことは忘れてはならないだろう。検討するべきなのは、このような擴張的イデオロギーを青年たちに呼びかけ、海外での資本主義的成功を担う主体として養成する青年向け雑誌メディアの存在である。

そのような雑誌のひとつとして成功雑誌社「殖民世界」があった。成功雑誌社の看板雑誌「成功」は進学・就職情報誌の雄であり、発行部数は創刊二年目にして一万五千部を誇った人気雑誌であった。「成功」は、その主要な読者となる青年層のみならず、いわば学校関係者にも公的に認知されていた雑誌である。文部省調査によれば、この雑誌は「中等程度諸学校生徒誦読用書籍」の雑誌部門で『中学世界』『実業之日本』その他二誌とともに第一位の三十校以上購読欄にランクされている。²³⁾一九〇八(明治四十一年)五月、その成功雑誌社は、『成功』『探検世界』に次いで『殖民世界』という雑誌を創刊する。高橋山民「殖民世界発刊の主旨」は、その創刊号において以下のように主張する。

国内の状況如何と顧れば、人口は日々に増殖して人々職を獲るに窮し、物価は月々に騰貴して、万衆生計の困難を訴ふ、限りあるの地に、限りなきの民庶、群集して一饜の肉を争ふにも似たり、是れ豈経世家たる者の大に着目すべき所にあらずや。

翻つて海外の地を觀ば如何、万里の郊野徒に横りて、人の来り耕さんことを疎ち、千里の長江空しく流れて、我の来りて其岸に商工業の旗を翻へさんことを待つ、〔中略〕

首を回して觀よ、滿洲の地、韓国の土、南米の沃野及我が新領土たる樺太台湾の如きは皆我邦人の来つて移住せんことを鶴首して待ちつゝあるにあらずや、〔殖民世界』第一卷第一号、一九〇八年五月、二三頁―二四頁〕

²⁴⁾ 続けて高橋山民は「噫時は来れり、我が国民が殖民すべきの時は来れり、活動すべきの時は来れり」(同前)と喝破する。その『殖民世界』編集部が企図した〈殖民〉するべき対象地域は東アジア地域や南米そして植民地下樺太・台湾で

あった。なかでも特に注視されるのは朝鮮・満洲である。「殖民世界」第一巻第五号掲載の現代諸名家十一名によるアンケート特集「本邦青年海外殖民要訣」では、その内十名が「殖民すべき方面」として朝鮮・満洲を挙げ、また同時に慎重派も含めて八名は国内の就職事情悪化に伴う青年層の海外雄飛を支持している。²⁵ ここでは、「殖民」に関するある特徴が指摘できる。同時期の『成功』『殖民世界』の読者投稿欄を概観すれば、実際の海外移住志望者に人気のあつた地域が北南米大陸であつたのとは対照的に、アメリカでの日系移民排斥問題等の諸事情から『殖民世界』編集部や著名人が推薦するのが朝鮮・満洲といった東アジア地域に偏る傾向にあるということである。「殖民世界」の執筆には政府関係者や在韓在満の有力事業者が多い。

それゆえか『殖民世界』発刊に際し読者に海外雄飛の必要性を説くという高橋山民のような論調は、おおむね掲載論説の一致する見解となる。創刊号から典型的な事例を二三参照しておこう。巻頭を飾る大隈重信「大和民族膨張と殖民事業」は、「凡そ民族の膨張は国力の伸張を意味し、民族の低減は直ちに国家の衰亡を意味する」として「日章旗の下に海外万里、至る処殖民を送り以て自然の富を開拓し、獲得することを努むべきが大急務である」(二頁)と主張する。また南満洲鉄道株式会社総裁である後藤新平の「帝国大学の殖民講座計画」では「国民に殖民的知識の普及を計るに若かず、而して之が普及を計らんには先づ其の淵源の培養を勗めざるべからず」(四頁)とその教育面に着目する。殖民政策に対する実用的な学術的アプローチを最も重視する後藤は「帝国大学に殖民科の講座を置く」(同前) 必要性を力説するのだ。のちに東京帝国大学でその教鞭を執るのが新渡戸稲造である。

高橋・大隈・後藤各論の共通する鍵点となるのは、ともに殖民事業の奨励・推進の根拠が当時の人口・経済問題を打開する突破口として見出されるという点、そのためにもまず青年層に対して「殖民的知識の培養」(大隈、三頁)を説くという啓蒙的側面を強調する点にある。むろん「殖民的知識の培養」を目的とするのが成功雑誌社『殖民世界』発刊の意図に重なるというわけである。

さらに興味深いのは、「殖民的知識の培養」を推進するひとつの具体策として文学的効能の積極的活用が叫ばれたことである。当時衆議院議員であり、やがて南進論を積極的に支持することになる竹越与三郎は、それを「殖民文学」と称し次のように言及する。

第三に余が本誌歓迎の理由としては、年来余の尤も遺憾とせるは、我国に未だ殖民に関する機関なき事なりき、而して又殖民文学の欠乏にてありき。本誌は能く其の欠陥を充たし、一面又殖民文学興隆の急先鋒として現はれたるものにして、併せて殖民的知識の普及のため、与つて力多かるべきは余の囑望して喜ぶ処なりとす。願はくば自愛自重し、我が国民性をして極めて適当に刺戟し指導することを励められよ。(竹越与三郎「殖民文学を振起せよ」、六頁)²⁶⁾

新雑誌『殖民世界』の発刊には、このような議論が浮上する契機があつたのだ。「殖民文学」とは、文字通り「殖民」に関する主題を取り扱つた文学作品というほどの意味合いだと考えてよいのだが、竹越「殖民文学を振起せよ」の骨子もまた青年層を対象に殖民事業をイデオロギーとして伝播・流通することにあることは明白であらう。「即ち高等の学校には宜しく殖民科を設置して之が養成に力を致し、社会は又大に殖民文学の興隆を計り、此等に関する史伝や事業を伝へ、以て凋落せんとする我青年の元気を興奮せしむべきを切望するもの也」(七頁)。このように彼の議論は「殖民的知識の普及」という点においてはさらに一步踏み込んでおり、学校教育のカリキュラムとしては高等学校の段階から、そして学校教育の外では「殖民文学の興隆」を推進するべきとして論を展開する。重要であるのは、この「殖民」イデオロギーをより広く「社会」に向けて流布する媒体に文学が選ばれたという点にある。

現に『殖民世界』では小説・詩各一編を掲載する「殖民文学」欄が常設されている。創刊号を例に挙げれば、立志小説の舞台を南米にした堀内新泉「殖民小説南米行」と「植ゑよ、桜と柳の木、／植ゑよ、大和の男と女」と吟じる児玉花外「行く鴻」といった具合である。けれどもより注目すべきは、竹越与三郎のいつた「殖民文学」提起の意図の方であらう。すなわち「凋落せんとする我青年」として想定される読者層は煩悶青年像を彷彿とさせ、「殖民」についての「史伝や事業を伝へ」という内容は当時各種教育雑誌で取沙汰された反自然主義的傾向と見事な合致をみるからである。たとえば、道徳と文芸の進歩的な調和を論ずる井上哲次郎(「道徳と文芸」、『教育界』第九卷第三号、一九一〇年一月)は、「醜悪なる自然主義の小説」の「嚴禁」を呼びかけ、青年の読書対象としては教科書・偉人伝・旅行記等が適切であると主張している。ここからすれば、「殖民文学」とは、当時文壇の主流であつた自然主義文学の潮流と真っ向から対立する体制的傾向を有する文学像として位置づけることができるであらう。殖民事業を奨励・推進する成功雑誌社『殖民世界』は、煩悶青年や自然主義現象をして語られる青年層を対象に健全な「殖民」イデオロギーを注入することをその主要意図に盛り

込んだ青年向け雑誌メディアであったのだ。

五、〈殖民〉 イデオロギーと規律・訓練の朝鮮

〈殖民〉イデオロギーの企図は、いわば他者を想定した「劣等なる者を高尚にする為め」（新渡戸稲造）という植民地主義的な目途に比重をおくというよりも、まずもってその伝播及び海外に雄飛する青年たちの教育的養成を主眼とするものであった。青年層を対象にした殖民事業の推進には、「殖民的知識の培養」（大隈）に力点がおかれ、より広く青年層にその拡張主義的なイデオロギーを内面化させるために「殖民文学」という文学的効用さえもが求められ説かれたのである。メディアを媒介に、このように知的言説により〈殖民〉イデオロギーが主張される事態はまた、殖民事業の必要性が社会的に高まり状況的に求められたということを意味する。けれども、この〈殖民〉イデオロギーは、日本内地の青年たちにかように提示されたのであろうか。

一九〇六年の新渡戸稲造の韓国旅行の事例のように、当時すでに朝鮮はツーリズムの対象となっていた地域でもあった。もちろん、ツーリズムにはさまざまな形態があるのだが、ここで考察してみたいのは〈殖民〉イデオロギーにも通底する面をもつと思われる各種学校の修学旅行という観点についてである。まずはその差異化のために、青年層ではない一般起業者向けの殖民事業に関するひとつの事例を参照する。「渡韓者の注意（木内農商工部総長の談）」（『都新聞』、一九〇六年八月二四日）は、「▲中流人士の渡韓」を対象に次のように述べている。

韓国に渡航して諸般の経営を為さんと欲すものハ大資本家可なり大会社可なり然れども予等の最も希望する所を謂ハバ成るべく中流の資産を有する大多数の人士が永住の目的を以て続々渡航するに在り蓋し彼国に文明を移植して其開発に力を致さんと欲せバ宜しく彼の国民と緝睦親和し漸次彼れを同化せしめて互に相頼り相援け以て今後に於ける相互の発展を図らざるべからず、

もとより指摘するべきは、この記事において中産階級以上の渡韓者に説かれる〈殖民〉イデオロギーが、「劣等なる者

を高尚にするため」(新渡戸稲造) という植民地主義的言説との整合性をもつという点にある。日露戦争後から日韓併合期にかけての日本の韓国経営に必要とされたのは、「大資本家」「大会社」の巨大資本による経済圏の帝国主義的な拡張であり、また、朝鮮において直に事業基盤を確立する人的資本の移植でもあったのである。その任を担うのはある程度の資産を有する中産階級であるとされる。その中産階級の渡韓者にまさに要請されたのは「文明」の「移植」であり、朝鮮人の「同化」であつたのだ。

けれども、それが各種学校の修学旅行の場合になると事情は少々異なるようである。修学旅行の対象地域に台湾・満洲・朝鮮方面が選択された端緒について、「学生の満韓旅行——御用船便乗——」(『読売新聞』、一九〇六年六月二八日)はこう伝えている。「本年の夏期休暇に当り、陸軍省は中学程度の生徒職員に限り、御用船数隻に無賃便乗を許すこととなり、現に第一着として七月十日鹿兒島中学生徒一百名を便乗せしむるの運びなり」。のちの新聞報道から正確にこの動向に関して記しておく、「鹿兒島中学」とあるのは「第七高等学校造士館」の誤りで、また文部省は「中学程度」という規定を「中学程度以上」に限定・変更している。その第一回となる樺太丸には、鹿兒島造士館・高等師範学校・東京府立各学校生徒が乗り込む運びとなつた。もちろんその導火線になつたのは、前述の関釜連絡船をはじめとする日本内地から満韓へといたる交通網の整備であり、満韓地域を対象とする事業熱である。そこで問題となるのは、満韓への修学旅行をとおして青年たちに何が期待されたのかという点である。

是れ何れも喜ばしき現象にして、日露戦争の結果を實にするの方は、唯だ此一事に過ぎず、然れども由来鎖国的氣風に感染せる我国民は、僅かに一葦帯水を隔つる是等滿韓の地すらも、尚ほ海外万里、遠国たるの觀念を脱せず、偶々事を此地に企てんとするも、之を止むるの父老なしとせざるは、畢竟未だ其事情の明らかならざればなり、(『学生の満韓旅行』)

加之、目下我国勢は大に外に向つて發展せんとし、台湾の経営より、滿韓の勢力扶植に至るまで、國民の精力を傾倒せざるべからざる事業多し、無論斯かることは年長者の仕事に属して、学業半ばの青年の関知する所にあらずれども、青年は聽て第二の國民として、現在の國民に代り、現在の國民の着手せしものを繼承して之れを完成すべき一大義務

あり、即ち今より修学旅行の傍ら台湾及滿韓の山川を跋渉して、他日の経営に資すべきは最も必要のことなるべしと思ふ。(「修学旅行の区域拡張——滿韓及台湾へ——」、『読売新聞』、一九〇六年六月二〇日)

これらの記事の文意は、必ずしも青年たちに「殖民」イデオロギーを要請するものではない。いやむしろ、後者の「他日の経営に資すべきは」という件から認められるのは、植民地主義的な性格の方が強調されるという点であろう。だが、より重要であるのは、前者の「鎖國的氣風に感染せる」という従来からの国民性についての批判的言説や、後者の「年長者」「青年」それぞれの役割に合わせたの区別というように、それが世代論的に把握されていることである。特に後者においては、修学旅行の対象地域が台湾・滿洲・朝鮮へと拡張されるその目途として、青年層を対象とした「第二の国民」像が掲げられている。「修学旅行の区域拡張」のなかには、なぜ台湾・滿洲・朝鮮方面への修学旅行が相応しいのかという利点が二点挙げられている。そのひとつは「滿韓、台湾には学生に取りて研究の材料に供すべきもの多くあるべし」という現実的なものであるが、もうひとつの利点については次のように記されている。

第二には、大陸への旅行は青年の氣宇を豪快にするの利益あり、初めての洋学者が漸く揚子江口に至りて、早く既に大陸の河川の如何に大にして、島國に養はれたるものゝ想像にだも及ばざるに一驚を喫し、従来己れの眼光の豆の如くなりしを恥づると云ふが如く、青年をして親しく大陸に旅行せしめ、大陸の山河を踏まじむれば、局量を広濶にして、島國根性を一掃するに於て多大の利益あらん、

まずはこのように要請される青年像が、成功雑誌社『殖民世界』における知的言説と重なり合うことを確認しよう。その上で指摘できるのは、青年たちに担わされる「第二の国民」像が、従来の「国民」像——「鎖國的氣風」「島國根性」——との明確な差異化をもつて提示されるということである。この来るべき帝國主義的な「第二の国民」像は、「殖民」イデオロギーと共鳴したかたちで立ちあげられるのである。

さらに青年層を中心にした「殖民」イデオロギーの言説構造と朝鮮修学旅行とを繋ぐ接点について展開する。大切であるのは、青年たちに期待される「第二の国民」像が、朝鮮が負的像で語られる地域であったという点とどのような関係性

をもつのかにある。それについて端的に述べる事例を以下に二つ挙げよう。ひとつは「昨年の夏は滿韓旅行が流行した、今年も多分旅行者が多いであらう」(二三頁)とする細山五嶺「●韓国内地」(『教育時論』第八〇〇号、一九〇七年七月)。もうひとつは、一九〇九年に朝鮮紹介記として連載された渋川玄耳「恐しい朝鮮」(『東京朝日新聞』、一九〇九年一月二六日)である。

最後に一言するが、韓国内地の旅行は非常に困難であるが、修養といふ点から見ると二つとは無い道場である。(細山五嶺「●韓国内地」、二四頁(傍点引用者))

唯つくづく感じたのは朝鮮に來なければ日本人の難有さは解らないといふことである、一種の愛国心養成には百卷の倫理教科書より朝鮮見聞が有効である、而かも其日数は馬関から京城迄の往復に一週間で足りる、春も秋も修学旅行地として絶好の天地である。(渋川「玄耳」恐しい朝鮮、(傍点引用者))

この時代に伝播する朝鮮像は劣等文化の指標として測られていたということは、もうすでに朝鮮が既知の異文化像として世俗的に共有されていたことの証左であった。「恐しい朝鮮」という渋川玄耳の表題や中村星湖「朝鮮へ、朝鮮から」にも表れていたように、渡韓経験者の増加や各種メディア報道に形成された朝鮮像は、日本人観察者による直接・間接的経験を媒介とする恐怖という隱喩が加わった文化像として伝播する傾向にあったようである。そして、次世代を担うべき帝國主義的な「第二の国民」像の養成という目途と、負的像として語られる朝鮮への修学旅行とを接合したのは、「修養」や「愛国心」という鍵概念であったのだ。もとより、「修養」とは culture の訳語である。この意味において朝鮮修学旅行を視野に含めた青年層を対象とする朝鮮殖民事業は、政治・経済的な面とともに文化の問題系としても浮上する。日露戦争後の朝鮮は、青年たちの「修養」や「愛国心」養成のための規律・訓練の場として見出されていたのだ。それは、來るべき帝國主義的な国民像の形成における道德的な処方箋でもあったのである。

おわりに

日露戦争後から日韓併合期にかけての朝鮮殖民事業は、日本政府の対韓政策における外交・経済的観点からのみでは語ることはできない。少なくとも実際の渡韓・移住者層を考えるならば、それは日本内地における社会的な閉塞状況との相関において展開されていたといえるであろう。この時代に急増する朝鮮渡航・移住者たちの存在は、新聞雑誌メディアにおいても、なおかつ、日常的にも顕在的になりつつあったようである。この点、当時流通する朝鮮像の享受層であった朝鮮渡航・移住者はまた、その像を新たに伝播・更新する媒介者でもあったということを忘れてはならない。この時期を端緒にして一般の渡韓経験者が朝鮮像の伝播・更新にはたした役割は、直接・間接を問わずとも無視できる問題ではない。それはまた、負的朝鮮像が、比較項として日本の文化を語る言説の枠組みのなかに内面化されるプロセスでもあるからである。

この時代の朝鮮表象を考える場合、日露戦争後に展開された朝鮮殖民事業の推進が重要な鍵点であった。青年層の動向を視野に含めれば、当時の殖民事業はかれらの就職事情とより密接な関係性を有していた。成功雑誌社『殖民世界』を対象にみたように、知的言説により流布される〈殖民〉イデオロギーの目途は、青年たちを海外それも東アジア地域へと雄飛させ、将来かれらの立身出世・資本主義的成功の場をそこに見出させる志向性を明確に打ち出していた。海外に雄飛する青年像という成型は、このようにして日本の帝国主義的拡張の尖兵として創出される。そして、満韓修学旅行に関する言説から窺えたように、この際にも負的朝鮮像は利用されたのである。朝鮮は文化的ヒエラルキーの下層に位置づけられた地域として伝播されていた。けれども、修学旅行で青年たちが赴く朝鮮は、次世代を担う「第二の国民」となるための「修養」や「愛国心養成」に繋がる規律・訓練の場として再び加工されたのである。

本論では、日露戦争後の朝鮮殖民事業を、朝鮮表象・青年就職事情・国民像形成といった観点から検証した。このような考察を経て明らかになったのは、この時代に伝播・流通された負的朝鮮像は、それ以前と比較しても内容においては類型的であるものの、それを産出する文化的諸相においては異なる面をもつということである。さらに言えば、この点、植民地主義と〈殖民〉イデオロギーとの交配という位相に連なる問題がある。〈殖民〉イデオロギーは、支配・被支配関係から一枚岩的に規定される植民地主義とは区別されるべき言説としてあったのだ。教育・社会的観点から「殖民的知識の培養」「殖民文学」といった言葉となりその必要性が説かれた〈殖民〉イデオロギーの目途は、「劣等なる者を高尚にする

為め」という植民地主義の低位概念に含めることはできようが、必ずしもそれに重なるイデオロギーであったわけではない。その目差すところは、むしろ来るべき国民としての帝国主義的青年像の養成に力点がおかれていたのだ。この意味において〈殖民〉イデオロギーは、帝国主義とナショナリズムそして植民地主義を相互に媒介する補完的な言説構造を有しているものであり、そのなかで産出される朝鮮表象は、その必須な条項として参照され利用されたのである。

注

- (1) これに関しては、拙論「従軍文士の渡韓見聞録——日清・日露戦争期の〈朝鮮〉表象と与謝野鉄幹「観戦詩人」——」（筑波大学国語国文学会）『日本語と日本文学』第一九号、一九九九年八月）において分析している。
- (2) 新渡戸稲造『枯死国朝鮮』、『新渡戸稲造全集』第五卷、教文館、一九七〇年、八〇頁。この文章は一九〇六年一月全州での文章である。当事すでに新渡戸は台湾総督府の嘱託・東京帝国大学教授・第一高等学校校長という履歴をもっていた。
- (3) 新渡戸稲造『日本の新責任』、『新渡戸稲造全集』第五卷、教文館、一九七〇年、六三—六四頁。
- (4) 新渡戸稲造『新渡戸稲造全集』第四卷、教文館、一九六九年、四一頁。本文中に言及される「民族精神」とは nationalism の訳語である。また、「The White Man's Burden」については以下を参照。Rudyard Kipling, *The free nations*, (Leipzig: B. Tauchnitz, 1903), pp. 101-103.
- (5) 島崎藤村『藤村全集』第二卷、筑摩書房、一九六六年、九頁。
- (6) 嶺八郎『殖民の三要点』、『殖民世界』第一卷第五号、一九〇八年九月、一四頁。
- (7) たとえば、井上雅二「東洋に勢力を扶植せよ」、『殖民世界』第一卷第五号、一九〇八年九月）では「所謂單騎独行出稼をなして遺利を探り自家を立脚するは一言にして之を移民と称す可く」（二六頁）と述べられている。
- (8) 「第八二表 閩釜連絡船乗船人員」、『朝鮮総督府統計年報』、朝鮮総督府、一九二二年、一六四頁。因みに、一九〇六年の日本人渡航者総数は二九一三七人である（『第一次統監府統計年報』、統監官房文書課、一九〇七年）。
- (9) 「第四一表 現在内地人及増加」、『朝鮮総督府統計年報』、七五頁。
- (10) 東洋拓殖株式会社社の初期政策に関しては『東拓十年史』（東洋拓殖株式会社、一九一八年）を参照した。
- (11) 一九〇四年五月二二日発効の「対韓施政綱領」第六項には「拓殖ヲ図ルコト」が規定されている。
- (12) 前掲『東拓十年史』を参照。
- (13) 『日本帝国文部省第四十年報』上巻（宣文堂、一九七〇年、二〇五—二〇九頁）の各校統計図表による。細目は以下のとおりである。神戸高等商業学校生徒卒業後ノ状況（二〇五頁）における「朝鮮吏員」は、一九〇八から一九二二年期で一九〇八年度が三（計一四二）、一

- 一九〇年度が五(計一〇七)となっている。また、山口高等商業学校生徒卒業後ノ状況(二〇九頁)では、「朝鮮地方金融組合」同期間に一九一一年度は二(計七八)である。
- (14) ◎卒業生の売口(『教育界』第九卷第一〇号、一九一〇年八月三日、七九頁)。この記事の典拠は「東京朝日新聞」である。
- (15) 堀内泰吉・竹中政一『韓国旅行報告書』、神戸高等商業学校、一九〇六年五月。
- (16) 引用は第三版による。佐村八郎『渡韓のすゝめ』、楽世社、一九一一年、三―四頁。
- (17) 夏目漱石『漱石全集』第七卷、岩波書店、一九九四年、一六頁。なお、夏目漱石の小説における朝鮮・満洲の渡航・移住者像に関しては、西原大輔『漱石文学と植民地——大陸へ行く冒険者像——』(『比較文学研究』第六六号、一九九五年二月)で詳細に検討されている。
- (18) 中村星湖『朝鮮へ、朝鮮から』、『早稲田文学』、第三九号、一九〇九年一月、五頁。
- (19) 長岡新吉・田中修・西川博史『近代日本経済史』、日本経済評論社、一九八〇年、一〇九頁。
- (20) 中村隆英『明治大正期の経済』、東京大学出版会、一九八五年。
- (21) 無記名『投機熱と地獄道』、『成功』第一巻第一号、一九〇七年二月、二二頁。「事業熱」の場合と同様に、この「投機熱」に対しても「容易にして得たる物は容易にして失ふ、秩序を踏み、勤労を経て貯蓄したる物は一朝にして之を失ふ事なし」という教訓として記されている。
- (22) 拙論「語られる青年文化、〈地方〉、自然主義現象」(筑波大学日本近代文学会編『明治期雑誌メディアにみる〈文学〉』、二〇〇〇年六月刊行予定)を参照していただきたい。
- (23) 「中等程度諸学校生徒誦読用書籍」(『帝国教育』第三二二二号)の図表による。任意の学校の報告により纏められた調査統計表は文部省調査という公的性質を有する興味深い内容となっている。冒頭には「本調査は中等程度諸学校の報告に係り先年若干の關係方面に配布したるものなれども、其の範囲極めて狭かりしのみならず、今や全く絶版となりたれば、茲に「帝国教育」に交附して、世に公にし、中等教育關係者の参考に資す。文部省」とある。雑誌部門の内訳は「三十校以上」には「成功」「中学世界」「実業之日本」「英学生」、二十校以上」には「理學界」「英語青年」がランクされている。
- (24) 「殖民世界」の「本誌綱領」は以下の通り。「▲本誌は本邦に於ける殖民志望者の唯一伴侶と為り、海外に於ける統ての有利事業有望職業を同胞に向ひて紹介せんことを期す。／▲本誌は大陸的世界的の実業家を、我國民中に養成せんが為め能ふべき文有益なる商業工業農業等の材料を掲載せんことを期す。／(中略)▲本誌は能ふべき文海外に於ける新通信を掲げ、以て読者をして新時代の趨向を熟知せしめ、一世の指導者、率先者たらしめんことを期す」(『殖民世界』第一巻第一号、一九〇八年五月、特の一頁)。
- (25) 回答者詳細は以下の通り。根本正「廿八億國債償却は殖民に依る外なし」・花井卓蔵「海外に腕を振へ」・林毅陸「海外に運命を求めよ」・寺田勇吉「殖民者に必要の性格」・嶺八郎「殖民の三要点」・早田元道「思郷病は殖民の大毒也」・志田鉦太郎「新領土より滿韓に向へ」・井上雅二「東洋に勢力を扶植せよ」・力健次郎「殖民は農業本位とせよ」・大谷嘉兵衛「海外成功と人格修養」・神山潤次「自助

的精神の活躍に在り」(以上、掲載順)。

(26) 引用文中にある「我が国民性」とは「勇敢なる気象と堅確なる意志とを有する、最も殖民地建設に適したる」(竹越、七頁) というものである。しかし、竹越が挙げる具体例は何と「海賊」である。「称して海賊と云ふも実は良民にして只だ法令の禁を犯かしたるの謂たるに過ぎず」。それが海外雄飛に適する日本人の国民性の由来とされる。

(27) 『殖民世界』第一巻第一号から第五号における「殖民文学」欄は、堀内新泉「南米行」・児玉花外「行く鴻」(第一号)、堀内新泉「殖民隊」・児玉花外「殖民地子守唄」(第二号)、堀内新泉「深林旅行」・児玉花外「行け吾が男兒」(第三号)、三島霜川「一軒家」(第四号)、堀内新泉「青火」(第五号) という内容である。なお、第五号は「殖民文芸」欄となっている。また、本論では踏まえられなかったが、堀内新泉の「殖民小説」と雑誌『殖民世界』については、和田敦彦「立志小説の行方——『殖民世界』という読書空間——」(金子明雄・高橋修・吉田司雄他編『ディスクールの帝国——明治三〇年代の文化研究——』、新曜社、二〇〇〇年四月) がある。

(28) 井上哲次郎「道徳と文芸」(『教育界』第九巻第三号、一九一〇年一月、七頁)。井上はまず、「漢文復興」「漢学復興」現象を例に採り、それを「羅馬学会の主張」「醜悪なる自然主義の小説」の「反動」と位置づける。次に吉田松陰・二宮尊徳・赤穂四十七士等が前年春頃からの小説の素材として登場する徴候に注目している。また、井上の考えはこうである。学生の読書は、中学生時代には「教科書」及び「聖人君子英雄豪傑等の伝記其他色々の旅行記杯」が適切であり、高等学校時代にはじめて「健全なる小説」を読むべきである。

(29) 『読売新聞』所載による記事「学生の満韓旅行」●学生の満韓旅行(一九〇六年六月二十八日)、「●満韓旅行学生」(●第一高等学校の満韓旅行団体(同年七月四日)による。因みに、第一高等学校の場合におけるその費用の内訳について触れておけば、旅行日数は二八日間、船内の食費が一日三〇銭、上陸後のそれは一日五〇銭であったという。また、文部省が「中学程度以上」としたことに対しては小学校教育による批判がある(小学校教育の満韓視察)、『読売新聞』、同年七月六日)。

(30) 「学生の満韓旅行」においては、「我輩の大に賛成する所にして一には海国男兒の気風を養成し、二には知見の開発上、其の効果の夥多なるべきを信ずるものなる(後略)」と述べられている。

付記 本論文は財団法人トヨタ財団の助成による共同研究の成果の一部である。